

Title	サブノート：節合実践と民主主義構想
Sub Title	Articulation and democracy in action
Author	新嶋, 良恵(Nijijima, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2021
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.71 (2021. 3) ,p.51- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集1：現代民主主義におけるマス・コミュニケーション
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20210300-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サブノート： 節合実践と民主主義構想

新嶋良恵



▶ 問題の所在

政治社会統合に関する政治コミュニケーション論は、国民国家などの経済・政治的現象を対象として検証を行ってきた。それは主に、政治エリートの活動や、あるいは投票行動に代表される制度化された政治的行為や活動から、一般市民の政治社会や運動も視野に収めながら研究を進めてきた（大石2005: 6）。しかし、権力や支配といったまさに政治的な領域や現象の中で、文化の重要性は増大した。ここでいう「文化」とは、記号のシステムないしディスコース（言説）を指す。文化の持つ極めて重要な側面として、媒介となって意味秩序を一定集団の構成員に共有させていくという、意味付け過程や意味秩序の構造の問題にかかわる必要な作用に対する関心の高まり（2005: 6）についてはすでに広く認められるところだろう。近代国民国家を主たる対象としながら、拡大する「政治」の領域と、それと関連する「政治」概念の変容について、社会的作用や構築過程についての研究の蓄積は、政治コミュニケーション研究に影響力をふるってきた。このような文化の作用と権力への視座は、意味構成や意味秩序の問題として、文化（「記号」や「言説」）が、社会的現実それ自体を構成するものであると見なす「文化的転回」ないし「言語的転回」という思想全体の広い動きを反映したものだだろう。転回の下で、多様にして広汎な「意味」をめぐる思想が、人文社会諸科学の中に取り入れられ（佐藤2010: 101-102）、言語・言説の「力」「効力」に注意が向けられたのであった。

ミシェル・フーコーからジャック・デリダ、エルネスト・ラクラウなどへと連なる「ポスト構造主義」の流れから、コミュニケーション研究のスチュアート・ホールによる「節合（articulation）」概念の導入は、言語・言説を指示対象（現実）ありのままに再現する道具とみなす言語観を拒絶し、上述したような、むしろ現実を作り出していくという能動的な作用と、言語そのものが持つ力のあり方に着目するものであったといえよう。ラクラウとそして共同研究の多いシャンタル・ムフにとって、節合概念とは、本質的には何の結びつきのない要素を言説的に結び付ける実践である。それまでの言説理論の視点から発展させ、個々では無関係であった諸要素が連結されることにより意味を持ち、イデオロギー—「普遍性（一般性）」を標榜する支配的思想—を支えているという彼らの主張は、フーコーのように社会を「統合体」としてみるのではなく、「編成体」としてみることによって、ポスト・マルクス主義の課題であったマルクス主義経済還元論を乗り越えつつ主体の「抵抗」に着目することを可能とした。こうした実践の批判的マルクス主義研究は、言説そのものの編成過程の分析を通して、新自由主義的ポピュリズムという節合実践の閉塞的特性を可

視化した。

節合実践の閉塞的特性については、ラクラウやムフ（とくにラクラウ）の理論を言説分析の方法論として体系化するという試みがポスト・マルクス主義の政治理論において2000年前後から登場している（Torfing 1999; Howarth 2000; Howarth, Norval and Stavrakakis 2000; Glynos and Howarth 2007）。それは、ラクラウらの言説理論を具体的な政治社会の分析に活かそうとする潮流であったという（山腰2017: 53）。同時に、これらは、ラクラウらの議論に対しての批判の主なものでもあった。その批判の主たるところは、言説実践の開放性に期待したラクラウとムフの「ラディカル・デモクラシー」構想、いわば肯定的ポピュリズム評価に向けられたものである。多様な主体位置の平等主義的な結合により活気づけられた人民闘争（ラクラウが是とする）を企図するラディカル・デモクラシーは、節合概念を新自由主義的ポピュリズムの分析に導入し、ポスト・マルクス主義とコミュニケーション研究との架橋を行ったスチュアート・ホールによっても批判を受けた（Hall 1996b = 2014c）。

本稿の目的は、上記の認識のもとに、意味付け過程や意味秩序の構造を問題とする諸潮流を節合する社会学理論構想のための基礎として整理し、言説分析における節合概念を再解釈する道を探る点にある。その目的において、「ポピュリズム」という文化現象を対象に理論の検討を行ったラクラウとムフ、スチュアート・ホールそして、ポスト・マルクス主義からの批判を整理し、問題点を抽出していきたい。

▶ 言説編成への注目 フーコーからラクラウ

ミシェル・フーコーは『言説の秩序』で「discour デイスクール」（英語で「discourse デイスクース」）の編成にかかわる権力の関係に注目した。デイスクース（言説）の分析を権力の分析と強く相関させる問題意識から、『監獄の誕生』や『知への意志』を著したことは有名であろう。言語の出現や存在の仕方を規定するものは何か、言説のあらわれた場所と時代においてその言説固有の働きとはいったい何であったのか、ある時代の主体の成立条件を問いとして書き出した生をめぐる統治に関する著作は以後大きな影響力を持った。一般的なフーコーの言説分析は以下要約のようなものだろう。

フーコーが唱えた方法である言説分析 (*discourse analysis*) は、発話や書字と、ある時代・ある地域の言語活動の全体との中間にあつて、ある秩序をもった言語の集合を言説と呼ぶ。そして、言説の分布や偏り、特有の配列のなかに言説ではないものの作用を認め、それを「権力」と位置づけていく。(長谷川・浜・藤村・町村 [2007: 05])

言説の分布をみるフーコーの言説分析とは、言説の歴史的な編成のされ方を分析することを意味していた。すなわち、歴史の中で、言語表現として言説が出現し存在するわけだが、そうした在り方を成立させた社会的・政治的条件を探っていったのであった。「ある所与の時代において、あることは語るができるのに、別のことは決して語られないのは、いったいどういうことなのか。簡単に言うならば、語られた事柄の総体の中から、ひとが何を語り、何を打ち捨て、あるいは何を交換させているのか」(Foucault 1969=1999, p. 219) という言説分析¹⁾にとっての核をなすこの問いは、言説と権力に関する問題意識を持つフーコーにとって必然の問いであった。フーコーの言説分析とは、「編成のシステムは、特定の言説実践のなかで何の関係しあうのか、どのような現表がなされるのか、どのような概念が形成されるのか、どのような戦略が組織されるのかを確定している」(「地の考古学」: 74) ということ、言説の存在を支えている歴史的な条件を探る作業であったといえる。

フーコーは意味秩序が歴史的な構築物であることを打ち出し、様々な言表の分散・配分と言表間の関係性（論理的あるいは比喩的連関、相関、共存、矛盾、断絶などの様々な関係）を統御する規則がある中でその意味秩序が歴史的断絶を経て変化することを表現した（佐藤2010: 114）

そして、言葉と言葉の結び付けられ方、言葉の語られ方やその分布に独特の隔たりを発見するといった言葉の編成への探求は、権力と主体の関係へと進んでいく。「権力—知—主体」という社会的な実践の中に統治の現れを理論として関連することに至ったのは後期だと論じられる（箱田2013: 215-216）が、主体の内的構成と言説の編成という主題自体は「知の考古学」において、多様性の可能性として言及されている。

私の目的は……同じ言説実践のなかで異なった対象について語り、矛盾した意見を述べ、矛盾した選択をすることが人間にとっていかに可能なかを示すことである。（中略）要するに、私は主体の問題を排除したいのではなく、言説の多様性の中で主体が占めることが出来る地位や作用を定義してみたいのである（フーコー1979: 200）

このような視座を「言説の意味秩序の多様性・偶発性」へと拡張したのがエルネスト・ラクラウである。既知のとおり、ラクラウはシャンタル・ムフとともに、言説分析に節合概念を新たに導入した研究者である。ラクラウらは節合概念のもつ「実践」性を強調することで、言説編成をさらに不確定で絶えず変化するものとして捉えていったという（佐藤2010: 115）。

▶ 言説節合の開放性—肯定的ポピュリズム

ラクラウらの言う「節合」²はフーコーの「言表」に近い位置を占めている。「節合の実践」とはいかなるものかという点、意味が部分的に固定され「結節点」が構築するという過程である。ここでは、言説の場において意味が過剰に産出され、意味の同一性（アイデンティティ）が絶えず変化していきながら、「部分的に固定化」されるという過程を想定している。ラクラウとムフは、このように、言説を「節合の実践から生まれる構造化された総体」であると定義し、節合概念のもつ「実践」性を強調することで、言説編成をフーコーから発展させさらに不確定で変化を絶えず行っていくものとして捉えていく（佐藤2010: 115）。

そして、ラクラウらはラディカル・デモクラシーを掲げ、言説とヘゲモニーの理論的刷新を試みる（山腰2017）。これは、階級を軸に政治対立をとらえるグラムシとアルチュセールに残る古典的マルクス主義の唯物論的名残を放棄するように迫るものである。経済という最終的審判（最終的決定）が労働者主体の意識を規定するという経済決定論を退け、様々な社会運動の節合によるヘゲモニー実践の必要性を説いた（鈴木2019: 23）のであった。ラクラウとムフにとって、ヘゲモニーは、既存の意味関係を固定化・安定化させる原理であるとともに、既存の意味関係を流動化し、新たな意味関係を構築することを可能にする原理でもある（山腰2017: 52）。節合によって「諸要素」は結合されるが、断片化する前の本質的な全体性へと統合するのではなく偶然的に結合して組織すると考え、「節合」という語に、断片を有機的に節合するという意味と、他と分節するという意味のどちらをも含ませる。

こうした理論を文化に関する構造的アプローチという観点からみると「〈言表〉や〈節合〉などの〈実践〉の作用を取り入れることにより、言説における意味秩序の内的連関関係を時間化した」（佐藤2010: 117）と評価することができるという。

ラクラウらはデリダを参照しつつ、ディスコース的な場において意味が「過剰」に産出されるとする。そのため意味の同一性（アイデンティティ）は絶えず変化し、「部分的に固定化」されるに過ぎない。この部分的に固定化された意味の「結節点」を構築こそが、アーティキュレーションの実践である。ここで彼らは、「空虚なシニフィアン」としての主体を決して否定的にはとらえていない。むしろこれをマルクス主義の経済的本質主義を脱却する可能性として肯定的にとらえているのである。ラクラウの「ラディカル・デモクラシー」論は、この「空虚なシニフィアン」としての集合的主体がいかに形成されるのかにかかっている。これは彼の「ポピュリズム」論へとつながっていく。（佐藤 2010: 116）。

ラクラウらの言説観念は、このように、本来必然的な結びつきの認められない記号表現「シニフィアン」が経済という実定的な意味内容「シニフィエ」に求められるというマルクス主義の経済還元論を乗り越えようとする試みから生まれており、シニフィアンの根源的な「開放性」についても言及するものである。「言説としての社会」が、無限に戯れ差異を増殖させていくシニフィアンの運動の論理と、それを究極的には不可能であれ閉鎖し、固定された示差的関係をシニフィアンの間に作り出そうとするヘゲモニーの論理、という二つの「社会的なもの」の緊張関係の中に成立するものであるとすると、言説によって構造化された全体性を分析することは、節合されていないすべての差異は別の関係が成り立っていたかもしれないことを示唆する契機ともなりうるのだ。彼らはここにポピュリズムの可能性を見出す。節合実践を通じた意味関係の固定化は常に一時的・部分的なものに留まり、意味関係を固定化する単一の普遍的な原理は存在せず、意味関係の固定化は常に変化に対して開かれている（ラクラウ・ムフ 1985=2012: 252）というわけだ。

肯定的ポピュリズム論のもっとも顕著な特質は、ポピュリズムを人民としてのアイデンティティ構築の「政治的な論理」（Laclau 2005: 117）だと認識し、この主体化の論理を新しい普遍性の生成として理論化する点にある（鶴飼: 88）。つまり、肯定的ポピュリズム論が主張するのは、固有の本質をもたない人民には確定した輪郭がなく新たなフロンティアが縮引きされ直す可能性の聞かれているという点である（ibid: 89）。ラクラウにとってポピュリズムとは、同質性から排除された異質なことから「人民」なる集合的アイデンティティを構築することにほかならない（山本圭『不審者のデモクラシー』）。

この理論的展開の背景には、80年代以降の「新しい社会運動」があった。被雇用者としての労働者の増加により階級対立が「歴史的必然」とみなされなくなったこと、そして、フェミニズム運動、エスニックマイノリティによる運動、環境問題に関する運動や平和運動など、階級に還元されない多様な社会運動の勃興、労働者を中心としたヘゲモニーの獲得もまた必然とは認められなくなった流れを踏まえての議論発展であった。「新しい社会運動」に見られる現代の偶発的で多元的な闘争のスタイルを、理論的かつ実践的に表現することにラクラウとムフの思想的課題を要約することもできるだろう（向山1994: 80）。

意味関係の「偶発性」というこの特性は、言説が持つ不安定な性質として、「意味づけをめぐる政治」、そして「ヘゲモニー」を要請することになる（ラクラウ・ムフ 1985=2012: 298-299）。この文が示すところはすなわち、誰と連帯し、誰を敵とするかという可能性はつねに開かれ「偶然」であり、様々な運動は、ヘゲモニー闘争の中で「節合」される（鈴木2019: 23）ということとなる。ここにラクラウとムフは節合実践の開放性を見出す。彼らが提唱するラディカル・デモクラシーの企図とは、要約するとするならば、多元的な闘争をかく結びつけて新たな「人民」を立ち上げ、ラディカルな変革を可能にしようというものであった。

ラクラウによれば人民の形成は等価性の確立である。「等価性…が確立されるのは、等価的な鎖の拡張を通じて、さらに象徴的統一を通じて、さらなるステップが取られるときのみである」（Laclau 2007: 74）。民主主義の中で様々な闘争が生まれるが、それぞれの不平

等を告発する「特殊」な諸闘争を、不平等に立ち向かうべく「同じもの＝等価的」闘争として接続し、多元的な闘争が結びついた「人民」として立ち上がることでラディカルな変革が可能となる (ibid 171)。

確かに、このような肯定的ポピュリズムの在り方は、個々の多元性の表出を、常に義務付けられる集団の集まりであるという意味において同等のものとするため、多元性が確保された世界へと導くものであろう。何らかの一元的な同質化を目指すポピュリズムの分派はいずれポピュリズムの看板を外さなければならない (Laclau 2005)。ポピュリズムにおける「人民」のアイデンティティは、節合の実践によってのみ、そのつど与えられるしかない。諸々のアイデンティティが結びつくことによって敵対的なフロンティアが生み出される。そこで利用されるのが、「空虚なシニフィアン」(特定の意味内容をもたない指示記号)である (Laclau 2005=2018)。ヘゲモニー闘争の中では、特殊なアイデンティティと「人民」というシニフィアンが節合され、普遍的なものとしての地位を確立する。その際、自由、平等、友愛など抽象性の高いシンボル、そしてポピュリスト的指導者自身が空虚なシニフィアンとして使用されてきた。ポピュリズムは人民を構築しそれに意味を与える形式となる。ラクラウはポピュリズムにおける代表を、特殊性が普遍性へと接続するヘゲモニー闘争の実践として理解している (鶴飼 2012: 95)。

ここまで、節合概念の不確定性からポピュリズムの再考を促すラディカル・デモクラシーの視点を紹介した。しかしながら、具体的な政治・社会現象の分析という点から考察すると、空虚なシニフィアンの特性は、ナショナリズムを喚起する言説を用いて「人民」をそのまま国民と互換可能な存在として理解させ、正統な「人民」を白人マジョリティのもとに取り戻すといった主張を行うポピュリストによって多く利用されてきたと言わざるを得ない。研究動向を紹介すると、ラクラウらの概念を具体的な政治現象の分析のために洗練化させてきた一群の研究 (しばしば「エセックス学派」と呼ばれている) (Howarth, Norval and Stavrakakis 2000; Dahlberg and Phelan 2011) は、「敵対性」「等価性/差異」「異質性」などさまざまな分析概念に依拠しつつ、社会運動、ポピュリズム、政策過程、統治システムなどを対象に言説分析を行ってきた (山腰 2017: 55) という。ラクラウら自身が示すように、ヘゲモニー闘争における節合実践は、その閉塞性の実証という側面から、政治・社会分析の枠組みとしては大変有効であろう。次項その点についてみていきたい。

▶ 言説節合の閉塞性分析—右派ポピュリズムと言説分析

ラクラウらは、節合の閉塞性を示す具体例として、スチュアート・ホールによる言説分析を使用した研究などを援用しつつ、新自由主義的な思想 (自由競争、個人主義、利己心、反国家主義など) と伝統的な保守主義の思想 (ネイション、家族、権威、規範、伝統、秩序) が結び付けられていることを論じている。ホールの検証によると、移民たちが自分たちの職を奪う敵だと考え始めていた白人労働者から福祉政策削減方策への支持を取り付けるために、移民たちを「たかり屋」「怠け者」であるとコード化する一方で「英国らしさ」が強調されることによって、実質的な人種差別が機能したという (渋谷 2004)。すなわち、英国でサッチャリズムが伝統的な保守主義と新自由主義を結び付けたことを指摘したのであった。

ホールが、言説分析を用いた新自由主義をめぐる研究などで取り組んだのは、以上を代表とするような節合がもたらす意味作用についてであった。それは、①相互に無関係である諸要素の意味的な連結により成立するイデオロギーの統一性、②アイデンティティの構成、③敵対関係の構成、を通して行われる。ネガティブな言表と、マイノリティ集団がメディア表象を通して節合されることによって、名指しされた集団全体に対するステレオタ

イブ的なイメージの創出がおこるといふ意味作用である。ホールが1970年代に行った犯罪報道の言説分析と、80年代に取り組んだ、「決定されえない過剰であると同時に過小として残される部分」と「決定されているものとして表象される社会的諸関係」の理論化（小笠原1998:266）がそのような意味作用を明らかとした。こうして、①のイデオロギーの統一性は、②と③という意味作用を持って行われることが明確となった。

具体的に見ていこう。ホールは、サッチャリズム下のイギリスで黒人及び移民が「マギング (mugging)」という強盗行為の担い手として分類され、「マギング」が当初の「若者犯罪」という定義からマイノリティによる犯罪へと変化していく過程を新聞記事や投書欄の分析から描き出した（Hall 1978）。このような言葉の連関、言説の編成と主体化のプロセスについての分析は1989年の「〈新時代〉（“The Meaning of New Times”）の意味」（1989=2014a）というサッチャリズムについて考察した論文においても行われている。編成過程の中で、サッチャリズムは、特殊な家父長的形態と文化的国民的アイデンティティをめぐって強力に組織化した。「イングランドらしさ (Englandness)、英国人である (Being British) こと、イングランドの「偉大さをもう一度」 (Great again) といったものの擁護は、サッチャリズム人気の源泉の意外な鍵であったとホールは分析した（前掲78）。

このようなプロセスを経て、サッチャリズムにおけるイデオロギーの統一は成功し、移民に対する福祉削減や都市貧困地区の犯罪を厳しく取り締まることの正当性を獲得し、白人労働者層の支持を勝ち得ていったという。すなわち、新時代としての流れとサッチャリズムの提供した新自由主義的な考えは同一の状況の中に集められ、この種の歴史的情況が複合的なものであっても、資本主義社会の帰結として新自由主義的な社会が理解されてしまうと論じているのだ。資本の優越、新右翼のヘゲモニー、商品化の進行という別々の過程が一つの単線的な論理の展開として固く結びつけられ、80年代の右翼支配が当然で不可避なものとして映るようにしたところがサッチャリズムの巧妙な点であるという（Hall 1989=2014a:73）。つまり、必ずしも「新時代」に刻印されているわけではない諸状況を、ある形で「新右翼」の政治的プロジェクトへと結び付ける試み、その運動そのものが「新時代」的なものとして力を発揮していると診断したのである（前掲66-79）。

これら言説分析に基づいた研究や新時代についての論考は、メディア上で行われる言説の構築過程を丁寧に読み解くことで、複数の読みの間にはヒエラルキー的な関係が発生し、他の読みに対して優位に立つような支配的・優先的な読みが存在していくという「メディア言説の生成過程」自体を時代的な流れを反映したものとして考察したものであった。ここでホールは、異なる諸勢力による言説の多元性と、それらが重なりあってある特有のイデオロギーの様相を形成しているということを示した。このようなイデオロギーの統一は、新自由主義による節合をもってして完成したというのが、以上みてきたホールによる70年代80年代論考の結論であった。本来は結び付いていないはずの言表同士を結び、一定の関係性を形成して、あたかもそれが自然な結節点として特権化され、それ以外の関係性を締め出そうとするという、節合による意味の固定過程の分析（すなわち閉塞性の分析）は、ラクラウとムフの言説観念をホールがコミュニケーション論に取り入れたメディア言説への注目から展開したものであった。

▶ 新たな「民主主義」構想—ラディカル・デモクラシー

「節合」の開放性を解説する中で、ラクラウらは、対象として認識されるものを所与のものとは考えずに、それは常に「言説的全体性 discursive totalities」の内部での「節合された articulated (な)」ものと捉えていた。同時に、こうした諸要素の連結により意味を持つという節合の意味作用は、ポピュリストが代表されるものとの相互構築的な代表関係を結

びつけていく際に強くその力を発揮することを意識し、新自由主義の興隆を分析した。その中で、自らの空虚さを利用し、雑多なものの「代表」と成るべく、様々な指示記号を自らを表象するものとして引き付けるイデオロギーの統一性を証明してみせた (Laclau 2005 = 2018 ポピュリズムの理性)。そして、敵対しあう社会的勢力は、ある言説を自らの言説に結び付け世論を勝ち取ろうとすると論じた (Laclau 1997)。

このような言説による節合の意味作用を、肯定的ポピュリズムとして既存の新自由主義的ポピュリズムから民衆のもとへと奪還しようとする、新たな「民主主義」の構想をしたのが彼らのラディカル・デモクラシーであった。特にラクラウは、ポピュリズムをナショナリズムに直接的に引き付けて解釈する常識的な傾向に対して、根本的な修正を迫る (Laclau 2005 = 2018)。節合概念により、意味秩序の不確定性、変容、多義性の解明への道を開き (佐藤 2010: 116)、アルチュセール以降の理論的挑戦が試みるべきだった、「階級」に還元されない社会的諸関係を抽出しようとする以上のような試みは、節合の「偶発性」論理から、新たな主体が立ち上がる契機を見て取るものだった。ラクラウらは、主体のアイデンティティそれ自身が言説の場の中で生み出される記号であり、その記号の意味の同一性も決して固定化されない「浮遊するシニフィアン」に過ぎないものとも議論している。そこから、節合の実践を通じて社会的主体のアイデンティティがさまざまに多義的に構成される可能性を示唆したのであった。そして彼らは、社会における異議申し立てを相互に結びつける言説編制のあり方を「民主主義的等価性」(Laclau and Mouffe 1985=2012: 396-398) と呼び、先に挙げた「新しい社会運動」など、80年代以降の異議申し立ての増殖に注目して、新しい連関の可能性を構想することを、民主主義を深化させる方法として提示した。

主体が決定不可能であれば、右派ポピュリズムの中で構築される「人民」のアイデンティティも固有の意味を有しておらず、それはヘゲモニー闘争の暫定的な帰結としてのみ提供されているにすぎない。ポピュリズム的な状況において、主体の中心はなく、「空虚なシニフィアン」としての記号があるにすぎないことから、肯定的ポピュリズム論が主張するのは、「固有の本質を持たない人民には確定した輪郭がなく、新たなフロンティアが線引きされなおす可能性に開かれているという点である」(鵜飼 2012: 89)。

しかしながら、こうした主体に関わる議論には批判も多くある。次項、ラクラウらに対する批判として、ポピュリズムの排他性に関する問題を指摘したホルの「節合」定義から、脱構築的な主体観に対しての彼の独特な位置取りについてみていきたい。

▶ ポピュリズムの根源的な外部という問題

ラクラウらに対する批判としてよく知られるところは、その「ポピュリズムの言説的性質」に対してである。極端に反「決定論」的な言説概念は、すべてを言説としてとらえる見方に走りすぎている (佐藤 2010: 116) というわけだ。すべてのものへと節合可能なのか、あるいはそうではないのか、いかなる根拠も挙げられておらず、「(マルクス主義的) 還元主義に対する批判が、完全に開かれた言説的な場としての社会という考えに直結してしまった」(Hall 1996b = 2014c: 38) という指摘である。この点は別稿に譲り、本稿では、批判の照準をもう一つの批判点、代表関係における決定不可能性に定めたものを主に紹介しよう。

ラクラウらの肯定的ポピュリズムはあくまで「言説」であって、ラクラウらは節合概念を、言説理論の視点から発展させ、個々では無関係であった諸要素が連結されることにより意味を持ち、イデオロギーの統一性を支えていると主張していた。この意味構築という側面は、「浮遊するシニフィアン」という記号の意味の同一性が固定化されないことから、社会的主体のアイデンティティは様々に構成されるよう開かれており、多義的な可能性を

も残す考えであった。

浮遊するシニフィアンは、位置づけられるまでは「要素」として存在し、あらゆる文節の可能性を示す。すべてが個々にばらばらであって、社会における完全な節合はあり得ない（完全だと主張するポピュリズムが存在するだけである）。「要素」の地位とは、何らかの言説連鎖に全面的には節合されえない、浮遊する記号作用という地位に他ならない。そして、この浮遊する性格は、最終的には、あらゆる言説的アイデンティティに浸透する（ラクラウ、ムフ1991: 182）。社会の基礎定理を拒否し、社会も集団も完全に結ばれることはあり得ないからこそそこに向かう運動が生まれるし、それこそが社会性＝集団性の条件たりうるというわけだ。解放・平等主義的な全体性の内部で、社会の完全性に向かう志向は、理性的な民主的制度へと大衆は向かうとした（「ポピュリスト的理性」）（Laclau 2005: 225）。複数の「利害＝関心」が出会い「同じもの＝等価なもの」として接続することで、多くの特殊な立場を自らの下に包摂するラディカルな変革は、単純化して言えば、多元的な闘争をかく結びつけて「人民」を立ち上げようというものであった。

空虚なシニフィアンは、等価性の連鎖を指し示す場合に限って、その役割を演じられる。すなわち「人民」を構成するように演じる場合だけである。換言すれば、デモクラシーは何らかの民主的主体の存在にしか根拠を有さず、それが出現するかどうかは、等価的な諸要求の間の水平的な節合に懸かっている」（Laclau 2005: 171）。

しかし、ラクラウらの等価性の確立について、ポピュリズム論との関連でいくつかの批判が上がっている。例えば、ラクラウのポピュリズム論は、ポピュリストと人民の垂直的な接続によって水平的なつながりを抑圧する可能性を無視している（Howarth 2008: 186）というものが一つ。人民が空虚な記号であり、脱構築の試みが行われたところで、ポピュリストと人民を接続する代表がなぜ可能であったかという、ポピュリズム的な代表関係が成立するその状態にこそ特殊性を見出される（Stäheli 2004: 238-239）とするものが一つ。これらから導かれる点は、ポピュリストを自らの代表として認め、「人民＝ポピュリスト」という代表関係をもたらしその過程にも着目すべきだという批判点であろう。

このようなポピュリズムの根源的な外部を指摘する声に対して、ラクラウの応答はそれを事実上受け入れるものであるという（鵜飼2015: 100）。確かに、肯定的ポピュリズムの在り方は、個々の多元性の表出を常に義務付けられる集団の集まりという意味では同等であり、多元性が確保された世界へと導くものであろう。しかし、私たち主権者の代表制が、既存の代表制によって調達できないことが常態化し、こうした代表をめぐる危機がポピュリズムの温床となってきた（鵜飼2012: 93）というのは当然のこととして導かれる批判点であることから、現代の代表制民主主義の問題点として、ポピュリストと人民をつなぐ民意に目を向けなければならないだろう。

▶ 歴史的諸勢力という分析的視座と左派への呼びかけ

古典的マルクス主義の経済決定論や本質主義側面に対するアンチ・テーゼとして、言説における意味の不確定性に期待した左派への呼びかけは、スチュアート・ホールも行っている。ホールが新自由主義的ポピュリズムの研究から提起したのは、「現在をつくり出しのまま言説的な節合に対する制約や決定因として機能しつづけている歴史的な諸勢力」への分析的視座である（Hall 1996b = 2014c: 40）。それは、単純な階級還元論などでは決してなく、「階級分派の客観的位置と、これらの人びとが『自発的に』惹きつけられる思想の限界と地平の間には、何らかの関係もしくは傾向が存在する」と、マルクス主義から「傾向的

な歴史的関係「tendential historical relations」へのまなざし (Hall 1983 = 1998: 62) を抽出し、あえて「階級」と「階級意識」の間の「節合」可能性を模索しようとするものであった。ホールは、非本質主義的な、関係主義の問題意識の遡上で、社会的諸関係が具体的言説によって形成されていくそのメカニズムへの探求に我々の関心を導く。

ホールによる「新時代」論考は、多義性を持った言説が提起する問題が左翼を刺激することで社会変容についての論争の可能性が開かれるとして、左翼が乗り越え転換しようとする社会的条件についての新しい記述と分析の提示であった。サッチャリズムが体現した新自由主義が成功する「新時代」は、結果だけを見れば、古典的マルクス主義が指摘する社会関係のリバイバル、すなわち経済的な既存秩序の再生産にすぎないように見えるが、ホールによるこの論考は「経済」という下部構造の回収されつくされない主体の在り方を「新時代」の中から模索しようと呼びかける内容である。「抵抗」と「主体性」を再び大衆のものとするために、階級還元論に陥らないように配慮をしつつ、「集合的アイデンティティ」が社会的勢力として機能することを射程においた、「階級」と「階級意識」の「節合」可能性を大衆に呼びかけているのだ。特定の支配階級によってイデオロギーを一方向的に押し付けられ人びとが騙されているのではなく、異なる諸勢力による言説が多元に重なり合うその様相こそが「イデオロギー的な効果」を持つとして、「彼ら（大衆³) が世界をどのように意味あるものとして統合するかということの重要性に気づかなければならない」(Hall 1996b=2014c: 28) と、左派知識人を批判したのはそうした文脈からであった。

主体化との関連で、「まったく自由な浮遊」をしているかのごとく言説を捉える点にラクハウの限界をみてとり、批判したのもスチュアート・ホールであった。完全な開放性に対して、言説の現実構築性という観念から批判を加えつつ、イデオロギーの統一性がどのようにして確立されていくのか、そうした人々への関心をホールは以下のように記している。

節合 *articulation* とは、特定の条件下で、二つの異なる要素を統合することができる、連結の形態なのです。しかし、そのつながりは、いかなる時にも常に、非必然的で、非決定で、非絶対的かつ非本質的なものです。いかなる条件下であれば、ある種の連結をつくり出しうるのか、構築しうるのだろうか、と問いかけなければならないのです。したがって、言説のいわゆる「統合性」といわれているものは、実際には異質の、相違した諸要素の節合に過ぎないのでして、それはまた、別のあり方でいくらかでも再節合しうるものなのです。……節合の理論は、イデオロギーがどのようにして、人々にみずからの歴史的状態の意味を何とか取りまとめ、それに対する理解可能性を持つことを可能にする力を付与するか、考えさせてくれるのです。しかも、それらの理解可能性の諸形態をみずからの社会経済的あるいは階級的な配置や社会的な位置づけに還元することなしに、考えさせてくれるのです (Hall 1996b = 2014c: 33-34)。

スチュアート・ホール自身が展開しようとしたのは、「社会的な主体」としてマイノリティが生成される、その過程の中で主体性をいかにして奪還するのかという運動論である。ホールは、ラクハウらが、歴史的な諸勢力が言説空間で優位に立ち、節合に際して制約や決定要因として機能しながら現在を創り出しているという問題を見過ごしていると批判する (1996a=2014b: 40)⁴。

ポストモダン思想の影響のもと本質主義的要素をすべて消去しようとするラクハウらの思想に対して、ホールが展開した議論は、主体の否定的な「脱構築」にはとどまらない。いわゆる「ポスト構造主義」が行ってきたような、「人民」「人種」「民族」「男／女」といった歴史的集合的主体の構築性を暴露するだけでなく、これら集合的主体が歴史の中に確かに存在していたことを認めながら、新たな集合体への形成契機を紡ぎだすことである。それは単純な階級還元論などでは決してなく、ラクハウらが展開した「開放性」「偶発性」という節合が本来持つ不確定特性から主体形成の理論へと意識をつなげるものである。新自

由主義の台頭により加速した個々の主体の断片化という状況にあっても、既に存在している集合的の主体へと変化しうる契機を発見することをもこうした視座は示唆しているだろう。

▶ 結語

ラクラウらの取り組みは、マルクス主義から今なお需要可能な概念や視座の数々を批判的に継承し、再活性化するという模索であった（Laclau 1977=1985, Laclau and Mouffe 1985=2000, 1987, 千葉2012: 422）ラクラウらを批判しつつ参照するスチュアート・ホールが試みたのは、単純に、何か本質化された過去のようなものに永続的に固定されるという言説実践の暴露にとどまらず、特定の結果（カテゴリーの決定）をもたらず条件の理解を可能とする分析枠組みをマルクス主義から紡ぎだす作業であった。ホールは「社会—文化的なものによる必然の過剰決定（over termination of the natural by the social and culture）」という命題を、あえてマルクス主義から紡ぎだそうとしていた。

スチュアート・ホールが展開したのは、「社会的な主体」としてマイノリティが生成される過程の中で主体性をいかにして奪還するのかという運動論である。これは言説における節合実践の「開放性」、すなわち現実の非決定性を認めていこうとする立場である（Hall 1983=1998）。主体の、そして、言説の「歴史性」の重みを考慮に入れながら、開かれた社会を実践の中から取り出していこうとする作業は容易ではない。しかしながら、歴史的構築性を確認し、それを、「抑圧をもたらすもの」というだけではなく、集合的の主体と節合の緊張関係の中に、連帯の契機を見出そうというホールの視座が重要であることはこの点において確認される。なぜなら、節合実践の中でなぜ一つの意味が確固たるものとして受容されその一方ではほかの意味が退けられ周縁化するのか、という問いかけは、こうした意味作用のポリティクスの問題を意味付与のプロセスとして構造化との関係から考える言説分析の核となる問いそのものであるからだ。それは、右派におけるポピュリズム勃興の中で（新自由主義が席卷する中で）、ポピュリズム言説の「閉塞性」を観察すると同時に、新たな集合的の主体が立ち上がるという、契機についての目配りを可能とする。単純な虚偽性の指摘や、ポピュリズムが根源的に持つ排除の文法を避けつつ、異なる社会的勢力がいかにして、「浮遊するシニフィアン」を「部分的に固定化」し敵対関係を構築するのか、そのプロセスそのものへの注目の先に、閉塞を打開する綻びや新たな主体への道筋を見出す理論的發展が見込まれる。

● 注

1. 「語られたこと」に限定した分析を行う点で批判的言説分析の立場とは異なると一般的にはされている。こうしたフォーコー理解のもと、言説外の影響を徹底的に排除しようと研究方法の厳格さを求めるといった立場もあるが、言説の背後にある権力関係に考察をすすめる、いわば知識社会学に近いスタンスで分析を進めるといった柔軟性も、出来事に最も忠実な記述を行おうとするならば必要であろう。フォーコー自身は「言説的出来事が繰り広げられる空間を純粋なかたちで出現させること……それは、そうした空間をそれ自身の上に閉じることではない。そうではなくて、それは、そうした空間の内と外に諸関係の作用を記述する自由を、自らに与えることなのだ」（Foucault 1969 = 2012: 59）という言葉も残している。
2. 佐藤（2010）は「アーティキュレーション」という語を使用するが、本稿では表記を統一するため「節合」に変更した。同様に「ディスコース」は「言説」と表記した。
3. 引用者による加筆
4. 同様の批判は山之内（1997）「階級概念の危機と〈新しい社会運動〉」『現在に生きる遊牧民』岩波書店、372～373頁参照のこと

● 引用・参考文献

- Dahlberg, L. and Phelan, S. (2011) *Discourse Theory and Critical Media Politics*, Palgrave.
- Glynos, J. and Howarth, D. (2007) *Logics of Critical Explanation in Social and Political Theory*, Routledge.
- Hall, S. (1978) *Policing the Crisis: Mugging, the State, and Order*. Palgrave Macmillan.
- (1989=2014a) “The Meaning of New Times” in Stuart Hall ed., *New Times: The Changing Face of Politics in the 1990s*, London: Laurence and Wishart. (=「〈新時代〉の意味」, 葛西弘隆訳, 『現代思想スチュアート・ホール』42(5), 青土社 2014, 66-79)
- (1996a=2014b) 「イデオロギーという問題——保証なきマルクス主義」, 大中一彌訳, 『現代思想』42(5): 44-65.
- (1996b=2014c) “On Postmodernism and Articulation: an Interview with Stuart Hall”, ed. Grossberg, *Journal of Communication Inquiry*, 10(2): 45-60. (=ローレンス・グロスバーク編「ポストモダニズムとの節合について スチュアート・ホールとのインタビュー」『現代思想スチュアート・ホール』甲斐聡訳, 26(4), 青土社 1998, 22-43)
- Howarth, David. (2008) “Ethos, Agonism and Populism: William Connolly and the Case for Radical Democracy”, *The British Journal of Politics and international Relations*, 10: 171-193.
- Howarth, D., Norval, A. and Stavrakakis, Y. (2000) *Discourse Theory and Political Analysis: Identities, Hegemonies and Social Change*, Manchester University Press.
- Laclau, Ernesto. (2005) *On Populist Reason*, Verso.
- Laclau, Ernesto and Mouffe, Chantal, (1985) *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, London: Verso.
- Stäheli, Urs. (2004) “Competing Figures of the Limit: Dispersion, Transgression, Antagonism, and Indifference”, in Critchley Simon and Marchart, Oliver (Eds.), *Laclau: A Critical Reader*. London: Routledge. pp. 226-240.
- Stavrakakis, Yannis., (2004) “Antinomies of Formalism: Laclau’s Theory of Populism and the Lessons from Religious Populism in Greece”, *Journal of Political Ideologies*. 19(3) 253-267.
- Torring, Jacob. (1989) *New Theories of Discourse: Laclau, Mouffe and Žižek*. London: Blackwell.
- 鶴飼健史 (2012) 「ポピュリズムの輪郭を考える：人民・代表・ポピュリスト」『法学志林』第110巻2号 法学志林協会83-107.
- 大石裕 (2005) 『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房.
- 小笠原博毅 (1998) 「文化政治におけるアーティキュレーション」現代思想臨時増刊号第26巻第4号. 青土社.
- 佐藤成基 (2010) 「文化社会学の課題：社会の文化理論に向けて」『社会志林』第56巻第4号. 法政大学社会学部学会 93-126.
- 鈴木宗徳 (2019) 「左派ポピュリズムと不服従の知」『経済系』第276集 関東学院大学.
- 千葉眞 (2012) 「解説」エルネスト・ラクラウ&ジャンタル・ムフ (1985=2012) 西永亮・向山恭一 (1994) 「ポスト・マルクス主義と〈根源的民主主義〉の可能性」『法学研究』第67巻第5号. 慶應義塾大学邦楽研究 79-113.
- 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬, 2007『社会学—Sociology: Modernity, Self and Reflexivity』有斐閣
- フーコー, ミシェル (1966=1999) 「ミシェル・フーコー『言葉と物』」廣瀬浩司訳『ミシェル・フーコー思考集成II』筑摩書房 304-312.
- (1969=2012). 慎改康之訳『知の考古学』河出文庫.
- 山腰修三 (2017) 「メディア・コミュニケーション研究と政治・社会理論—ヘゲモニー概念の展開とラディカル・デモクラシー」『マス・コミュニケーション研究』No.90, 47-63.
- ラクラウ, エルネスト. (1977=1985) 『資本主義・ファシズム・ポピュリズム —マルクス主義理論における政治とイデオロギー』, 横越英一監訳・大阪経済法科大学邦楽研究所訳, 拓殖書房.
- (2005=2018) 澤里岳史・川村一郎訳『ポピュリズムの理性』明石書店.
- (1985=2012) 西永亮・千葉眞訳『民主主義の革命：ヘゲモニーとポスト・マルクス主義』ちくま学芸文庫.
- (1987=2014) 「釈明なきポスト・マルクス主義」エルネスト・ラクラウ (1990=2014) 『現代革命の新たな考察』山本圭訳, 法政大学出版会, 150-202.
- (1992=2000) 『ポスト・マルクス主義と政治 根源的民主主義のために 復刻新版』山崎カラル・石澤武訳, 大村書店.

新嶋良恵 (十文字学園女子大学教育人文学部専任講師)